

日本語と英語の談話における話法の対照研究

塩田, 裕明

<https://doi.org/10.15017/2556301>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	塩田 裕明			
論文名	日本語と英語の談話における話法の対照研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松村瑞子
	副査	九州大学	教授	山村ひろみ
	副査	九州大学	教授	松永典子
	副査	九州大学	教授	大津隆広
	副査	山口県立大学	教授	西田光一

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語と英語の議論的談話及び日常談話を取り上げ、それらの談話に特有な話法の談話機能に着目し、さらにそれらの話法とレトリックの関係性を明らかにしたものである。

第1章～第3章では、本論文で展開する研究の背景、本論文の目的と意義、先行研究概観、研究課題、分析のための枠組み、研究対象データ、観察された話法を明らかにした。

第4章では、英語議論的談話における伝達動詞が単純過去形で用いられた話法と歴史的現在形で用いられた話法の談話機能について分析を行った。その結果、話し手は、伝達動詞を異なる時制で用いることによって視点を操作し、被伝達節の引用した発話が現在時においても通用するあるいは通用しないものであることを表示し、それを自己の主張に利用していることが明らかとなった。

第5章では、日本語議論的談話における指示副詞が用いられた話法と分裂文の形をとった話法の談話機能について分析を行った。その結果、指示副詞を用いた話法の場合、話し手はソ系とコ系の指示副詞を使い分けることによって引用した発話を自分あるいは相手の領域に位置づけ、それを自己の主張に利用していることが明らかとなった。一方、分裂文の形をとった話法については、主節内のモダリティ、テンス、アスペクトといった要素によって談話機能が異なり、話し手は目的によってそれらを使い分けていることが明らかとなった。

第6章では、英語日常談話における話法について、引用標識“be like”が用いられた話法と伝達動詞“go”が用いられた話法を中心に分析を行った。その結果、取分け前者については、引用した発話や思考をルースに解釈したものであることを表示するという点でルース・トーク標識であることが分かった。さらに、この標識は、発話や思考された言葉を一語一句引用するのではなく模倣演技のように表現することで、聞き手にその時の状況を想像しやすくさせるという効果があることが分かった。

第7章では、日本語日常談話における話法で用いられる引用標識に焦点を当てて、「みたいな」と「とか」を中心にそれらの談話機能について分析を行った。その結果、どちらも英語の“be like”と同様にルース・トーク標識ではあるが、思考・発話内容を相手の発話を要求するように言いさし表現として引用することで、対話者間で共話的会話を続けていっていることが明らかになった。

第8章では、話法とレトリックの関係性について考察を行った。英語と日本語の議論的談話に特有な話法はどちらもダイクシスが重要な要素となる。話し手は視点を操作することによって引用した発話や思考に対する捉え方を表示するのであり、話法をレトリック的に用いているのである。日常談話については、英語の場合、“be like”が用いられた話法と伝達動詞“go”が用いられた話法が聞

き手の発話解釈を助けることにつながり、一方、日本語の場合、「みたい」や「とか」が用いられた話法が日本語の会話スタイルである共話を作り上げるのに貢献することが明らかとなった。

最後の第9章では、本論文の結論、研究の意義及び今後の課題と展望について述べた。

本論文の意義としては、これまで共通の基盤で議論されることの少なかった日本語と英語の話法を統一的基盤から議論したこと、さらに議論的談話・日常談話という異なる種類の談話における話法の用法から、それぞれの言語の会話スタイルの類似点・相違点について明らかにすることが出来たことが挙げられる。この結果は、今後の日英語の話法の対照研究の指針となることが期待される。以上により、審査委員は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位に値すると認められると判断した。